

芥川龍之介の世界

目次

芥川龍之介の世界

「羅生門」

- 一、冒頭の文章
- 二、下人の置かれた状況
- 三、楼の内を覗いて見ると…
- 四、一人の老婆を見つける
- 五、老婆の前に躍り出る
- 六、老婆の言葉
- 七、下人の反応
- 八、老婆と下人
- 九、老婆の論理
- 十、諸刃の剣

「杜子春」

- 一、若者と仙人
- 二、蛾眉山の魔性たち
- 三、新たな生活

(参考文献)

- 一、若者と老人との出会い
- 二、大金持ちになった杜子春は…
- 三、仙人になりたいと…
- 四、蛾眉山の魔性たち
- 五、魂は、地獄へと…
- 六、新たな生活

「蜘蛛の糸」

- 一、お釈迦様の想い
- 二、地獄からの脱出
- 三、再び、地獄へと

「藪の中」

- 一、木樵りの物語
- 二、旅法師の物語

- 三、 放免ほうめんの物語
四、 媼おきなの物語
五、 多襄丸たじょうまるの自供
六、 清水寺しみずでらに来れる女の懺悔ざんげ
七、 巫女みこの口を借りたる死霊の物語
八、 事件の真相

※ 参考文献

羅生門

羅生門

例えば、芥川龍之介の数多くの「作品」の中でも、世界的にもよく知られている「作品名」の一つと言えば、それは、やはり映画でお馴染みの『羅生門』ということになるかと思うが、ただ映画の『羅生門』というのは、内容的には『藪の中』の作品が描かれているものであり、それでは、実際の『羅生門』という作品は、一体、どのような「内容のもの」になるのかと問えば、それは、まさに次のようなものになるのである。

一、冒頭の文章

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀（この蟋蟀は今日の蟋蟀で季節は秋になる）が一匹とまつている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。（それほどさびれていた。）

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災がつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。洛中（京域内）がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしないう事になってしまったのである。

その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷓尾（名古屋城の金鯱のような飾り）のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいか（暮方や雨で）、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面炮を気にしながら、（だとすれば年齢的にはまだ若い下人か？）、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。（本文）

*

*

それでは、この作品の「内容」を順を追って見ていきたいと思います。それが、次のような有名な「冒頭」（つまり「書き出し」）から始まるものである。つまり、「……ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかに誰もいない。（中略）、何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とか云う災がつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、それを路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。洛中（京域内）がその始末であるから、羅生門の修理などは、

元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと言う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである」とある。しかも、「……昼間から夕暮、数多くの鳥たちが集まって、門の上にある死体の肉を、啄みに来るのである」ということである。

さて、ここまでの「状況」説明を読むだけでも、これからどういことが起こっても、何も不思議なことではないという、ほとんど「無法状態」に近い状態にあるということである。それでは、この「設定」は、一体、何を意味するのかと問えば、それは、われわれ人間というのは、誰でも何らかの「道徳観や倫理観」などを持ち合わせているかと思うが、しかし、それも「衣食住足りて、初めて礼節を知る」ということであり、もし、生きるための最低限の「衣食住」さへも欠落してしまえば、つまり、このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない、というような状況にまで追い込まれた時に、なお「道徳観や倫理観」などが健全に機能するものなのかどうかの「大問題」を提示しているのである。——そして、登場人物の下人も、まさに「この問題」で悩んでいたのである。というのも、実は、四五日前に暇を出され、それゆえ、行くところもなく、途方に暮れていたのである。このままでは、どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいいるではない。選んでいたら、結局、飢死するばかりである。それゆえ、手段を選ばないということは（頭の中では）「肯定」しながらも、（つまり、盗人になるしかないと思いつつも）、それを「実行」できずにいたという展開になるのである。それが次の「本文」である。

二、下人の置かれた状況

作者はさつき、「……下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれている」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下り（午後四時過ぎ）からふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支えている。——どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいいるではない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。

しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた（つまり「実行できずにいた」）のである。

下人は、大きな嚏（くしゃみ）をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧れない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思っただけである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死にばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。（本文）

*

*

さて、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。——つまり、下人は、これからどうしたらよいかと、とりとめもなく考えをめぐらしていたのである。そして、その「考え」の「具体的な内容」が次のようなものであり、それは、「……どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいゝではない」ということである。この文章の「意味合い」は、「……このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない。飢えて死なない、凍えて死なないためには、もう手段などを選んでいゝ余裕（時間）などない」のだ。もし、「……（手段などを）選んでいゝれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかり」である。それゆえ、もう一方の「手段を」選ばない」とすれば、「……下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した」とある。その「意味合い」は、「……下人の考えは、何度も同じ道（ところ）を低徊した（行ったり来たりと考えをめぐらした）揚句に、やつとこの局所（いわば結論）へ逢着（到着）した」のである。それは、結局、「……盗人になるしかない」という結論である。

しかし、「……この『すれば』は、いつまでたっても、結局『すれば』であった」とある。この文章の「意味合い」は、「……盗みをすれば、餓死せずすむ。それはわかり過ぎるほどわかっているが、しかし、いつまでたっても、結局『すれば』（盗みをすれば、餓死せずすむと考えるばかりであり）、実際にそれが「実行」できずにいたのである。それが、次の「文章」であり、「……下人は、手段を選ばないという事を（頭の中では）肯定しながらも、この『すれば』のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「……盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、彼の何らかの「道徳観や倫理観」などから、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた（つまり「実行できずにいた」）のである。

下人は、大きな嚏（くしゃみ）をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。（この雨風では、自然外での野宿はできない）。丹塗の柱にとまっ

ていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。(これは、ふと気がつけば、さっきいた蟋蟀も、夕闇とともに、もうどこかへ行ってしまったという時間の推移である。)

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧れない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。——つまり、下人は、(外の野宿はできないので)、門のまわりを見まわした。それは、「……雨風の患のない、人目にかかる惧れない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたから」である。すると、「……幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄(これは「柄に鮫皮をかけない木地のままのもの」)の太刀が鞘走らない(太刀が自然に鞘から抜け出ない)ように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた」と展開するのである。

三、上の楼の内を覗いて見ると……

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしているらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をとぼしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平にしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思つたより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を握ねて造つた人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくるがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唾の如く黙っていた。(本文)

* * *

さて、下人は、守宮のように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。(これは、何よりも、感づかれないようにと、細心の注意を払つて、一番上の段まで上りつめたのである)。そうして体を出来るだけ、平にしながら、頸を出るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を(どうなつてゐるか)覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の

光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくらがっていた、とある。

この部分は、書いてある通りであり、「……楼の内を覗いて見た様子をできるだけ具体的に描写しているところであり」、大事なものは、この次からの「文章」である。

四、下人は、一人の老婆を見つける

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。——下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。

——いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。(本文)

*

*

さて、「……下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ」とある。——まず、「ある強い感情」とは、一体、何かと問えば、それは、「強い恐怖と好奇心」であり、その「強い恐怖と好奇心」が、ほとんどことごとくこの「男の嗅覚」を奪ってしまったのである。それでは、その「強い恐怖と好奇心」の感情は、一体、何から生じて来たのかと問えば、それは、下人の「眼」

が「あるもの」を見たからであり、それは、「……下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている（一人の）人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると（この長い髪は大事であり）、多分女の死骸であろう」とある。

下人は、「……六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時（しばらく）は呼吸をするのさえ忘れていた」とある。まず、「……六分の恐怖と四分の好奇心」とあるが、例えば、「恐怖心」が「100%」であったならば、それは、もうただただ「恐怖心」で一杯になって、その場にも居られず、怖くて怖くてさっさと逃げ出していたかも知れない、つまり、非常に強い「六分の恐怖（心）」はあったが、それと同時に、「四分の好奇心」も同時にあり、その「四分の好奇心」によって、本来ならば、怖くて怖くて逃げ出していたかも知れない「その場」（その現場）に残って、下人は、「……老婆はここで一体何をしているのだろうか、それが知りたくなった」ということである。これが、やがて、下人の、「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」という言葉になり、また、「……己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと言うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をしていたのだから、それを己に話しさえすればいいのだ」という、下人の「言葉」にもなっていくのである。

*

*

さて、旧記（『今昔物語集』）の記者の語（言葉）を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。この「頭身の毛も太る」ように感じたとは、「……頭の毛も全身の毛もすべて太った」ように感じたのであり、いわば「……身の毛もよだつ以上の恐怖」を、下人は感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の尻をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行ったとある。——つまり、最初は、老婆は一体何をしているのだろうか、それこそ、ぞつとすると恐ろしかったが、しかし、女の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜いている姿を見て、それほど異常で、「恐怖」なことではないと確認できたのである。だからこそ、下人の心からは、「……恐怖が少しずつ消えて行った」のである。そして、「……下人の心から恐怖が少しずつ消えて行く」につれて、今度は、それと同時に、「……この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た」とある。——それは、下人の「頭の中」（或いは「心の中」）から「……恐怖が少しずつ消えて行く」につれて、本来の「人間らしい心」（それは本来の健全な「知性や理性」の働き）が戻って来て、まさに「……死人の髪の毛を抜くという事が、それだけで既に許すべからざる悪に見えてきた」ということである。

そして、「……いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである」とある。——これは、下人の「頭の中」（或いは「心の中」）から「……恐怖が少しずつ消えて行く」につれて、本来の「人間らしい心」（それは本来の健全な「知性や理性」の働き）が戻って来たからであり、それゆえ、「……この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、

餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである」となるのである。

下人には、「……勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であつた。勿論、下人は、さっきまで自分が、（このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない、というような状況にまで追い込まれた時の思考では）、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである」と続くのである。

五、下人は、老婆の前に躍り出る

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云うまでもない。——老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、飛び上った。「……おのれ、どこへ行く」。下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」と云いながら、

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残つたのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。

そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云つた。「……己は檢非違使の序の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようかと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」と。

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。「……この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしよと思つたのじゃ」。——下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を

持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。(本文)

*

*

さて、そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは言うまでもない。(これは、まさかこのような場所に人がやって来るなどは想像も出来なかつたからであり)、——老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、飛び上った。(それほどびっくりにしたということである)。「……おのれ、どこへ行く」。下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行くとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。(これは、目に見える「二人の活劇」場面であるが)、しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。(それでは、なぜ老婆を無理にそこへ扭じ倒したのか? それは、一つは、「憎悪の心」からであり、そして、もう一つは、次のことがぜひと聞きたかつたからである。それは、「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」とあるが、——これこそは、下人の「四分の好奇心」のまさに「言語化」であり、それは、「……ここで、一体、何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」と言うのは、まさにその「理由」がぜひと知りたかつたということである。

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く(執拗に)黙っている。(これは、唾の人は、言いたいことがたとえあつても、言葉が思うように出て来ない。それと同じように、老婆も、言いたいことがたとえあつても、(恐怖心その他で)、言葉が思うように出て来ないほどの精神状態であつたのである)。これを見ると、「……下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されると云う事を意識しました。そうしてこの意識は、今までかわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」とある。

さて、この文章の「意味合い」であるが、それは、次のようなことである。つまり、「……(老婆の)両手をわなわな震わせて、肩で息を切りながら、眼は、眼球が眶の外へ出そうになるほど見開いて、唾のように執拗く(執拗に)黙っている」その姿を見て、「……下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した」とある。——これは、「……老婆を生かすも、殺すも、また、何をしようが、すべては『自分』次第であり」、まさにその「全権を握って、完全なる支配下に置いている」という意識が生じることによって、お互いの「上下関係」は決定的となり、そうなるのと、今度は、相手を見下ろす「心の余裕と優越感」とともに、相手を赦す「心の余裕と優越感」までも生じてきて、その下人の「心の中」にあつた敵対する「憎悪の心」も、何時の間にか冷めてしまったのである。それが、つまり、「……そうしてこの意識は、今までかわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」

となるのである。

そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。「……己は檢非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」とある。——これは、まさに下人の「四分の好奇心」を具体的に「言語化」（言葉）にしたものであるが、——すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。（これは「下人の言葉が信頼できるものかどうか確かめたのである）。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。（それほど異常に「痩せ細っている喉元」であり）、その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。「……この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ」と云う。

*

*

例えば、平安時代は、特に「女性の長い黒髪」は、まさに「美（美しさ）の象徴」であり、有名な「十二単に長い黒髪」は、本来、自分の「美しい黒髪」であるが、時には、結び目の処からの「つけ毛」の場合もあり、また、当時の様々な「髪型」を結う場合にも、髪を付け足すこともあれば、また、ただ被るだけのすでに出来上がった「髪型」（鬢）の場合も当然あるのである。それは、古今東西を問わず、いつの時代のどこの国でも、人間の「髪の毛」の需要は常にあるのであり、それゆえ、人間の「髪の毛」がいろいろ「売買」されることはいつの時代にもあるのである。

*

*

さて、下人は、「……老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た」とある。——これは、一体、どのような「心理」かと問えば、それは、次のようなことである。つまり、自分の「予想」（或いは「期待」）が外れて、かえって「腹が立つ」という「心理」に近く、例えば、人肉を食べていたということであれば、それは、下人の「予想」を遙かに超えて、かえって「驚愕する」（或いは「恐怖心」）に襲われたかも知れない。つまり、われわれ人間というのは、自分の「予想」以下だと、「なあんだ」と、がっかりする気持ちになりやすく、一方、自分の「予想」以上だと、必ず、「驚く」という心理になるが、自分の「予想」通りや「予想」に近いと、やっぱりなという気持ちとともに、何かつまらないような気持ちにも襲われるものである。それが、まさに「……平凡なのに失望し、失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た」となるのである。つまり、下人には「四分の好奇心」（つまり「何らかの期待」）があつたのに、その「……期待が裏切られてしまい、失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一緒に、心の中へ入つて来た」という、元の「心の状態」に戻つてしまつたのである。

六、老婆の言葉

すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭か

ら奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。「……成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じやが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんたら、今でも売りに往つていた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじやて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじやて、仕方がなくする事じやわいの。じやて、その仕方がない事を、よく知つていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるのである」。老婆は、大体こんな意味の事を云つたとある。(本文)

七、下人の反応

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いていたのである。しかし、これを聞いてる中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか」。老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云つた。「……では、己が引剥をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」。——下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。そうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。……下人の行方は、誰も知らない。(本文・完)

さて、下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いてるのである。——まず、ここまでの内容で気になるのは、「……右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いてるのである」とあり、この下人

は、この「赤く頬に膿を持った大きな面炮」をよほど気にして、この年若い老婆にさえ見られることを恐れている。だとすれば、この「大きな面炮」がこの下人の一つの「コンプレックス」(劣等感)になつてゐるのだろうか？ また、なぜ、「作者」(それは「芥川龍之介」という人は、このような描写をつけ加えたのだろうか？ 例えば、この下人は、まだ年も若く、それゆえ、顔に「大きな面炮」一つでも、それが気になつてしようがないという、そういういわば人間としてはまだ「未熟な精神状態」の人間であるという「性格付け」になつてゐるのか？ この辺はよく分からないが、下人は、老婆の話を「……聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た」とある。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。(もちろん、この勇気は、「悪を憎む心」≪勇気≫ではなく、むしろ「盗み」≪悪を実行する≫勇気である)。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと言ふ事は、ほとんど、考へる事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されてゐた。(これは、老婆の「論理」がよほど下人の心に納得が入つたということである。)

「きつと、そうか」。老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云つた。「……では、己が引剥をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」。——下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。(これは「老婆の論理」を下人もそのまま実践したのである。)しばらく、死んだように倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。そうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜(これは「世の中」の暗さでもある)があるばかりである。……下人の行方は、誰も知らない。

八、老婆と下人

さて、雨風を凌いで、一晩寝られるところはと思つてゐたところ、「……幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」と思つて、階段を二三段上つて見ると、上では誰かが火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしてゐるらしい。見ると、楼の内には、幾つかの死骸があり、それは、裸の死骸や着物を着た死骸、男も女も混じつていて、死骸の腐乱した臭気も漂つてゐたが、その死骸の中に、蹲つてゐる一人の人間を見つける。それは、「……檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆であり、右の手に火をとぼした松の木片を持つて、人の顔を覗きこむように眺めてゐた。……」とある。この老婆は、一体、何をしているのかと問えば、それは、女性の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜いていたのである。それを見た下人は、その「行為」に激しい「憎悪」(つまり「悪を憎む

心」に襲われて、太刀に手をかけ、いきなり老婆の前へと躍り出た。老婆は、驚いて逃げ惑うが、やがて老婆の腕をつかんで、そこにねじ倒した。そして、「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」と、老婆をつき離し、鞘から太刀を抜いて、老婆の目の前につきつける。しかし、老婆は、わなわたと震えるばかりで答えようとはしない。

それを見ていた下人は、今までの「憎悪の心」は、次第に冷めて、「……残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」とある。これは、一体、どのような「心理」と問えば、それは、次のようなことである。つまり、「……下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった」とある。——つまり、これは、老婆を生かすも、殺すも、また、何をしようが、すべては「自分」次第であり、まさにその「全権」握って、完全なる支配下に置いている」という意識が生じることよって、お互いの「上下関係」は決定的となり、そうなると、今度は、相手を見下ろす「心の余裕と優越感」とともに、相手を赦す「心の余裕と優越感」までも生じてきて、その下人の「心の中」にあつた敵対する「憎悪の心」も、何時の間にか冷めてしまったということである。——つまり、われわれ人間の、いわゆる敵対する「憎悪の心」というのは、まだお互いの「雌雄が決していないからこそ生じる心理」であり、それゆえ、まさにお互いの「雌雄が決してしまえば、やがてはうすれていく心理」でもあるのである。

例えば、柔道でも、空手でも、或いは、レスリングでも、ボクシングでも、その他、どのような競技であれ、相手と戦っている時には、まだ、「雌雄は決していない状態」であり、それゆえ、この時には、相手への「敵対の気持ち」は、極めて強いものがあるが、しかし、一たび、「……雌雄が決してしまえば、相手への「敵対の気持ち」は、うすれ、お互い「握手をして、別れること」にもなるのである。

その場合、勝った方は、まさに「……ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかり」という気持ちになる一方、負けた方は、もちろん、「……くやしい気持ちとともに、しかし、まあ、仕方がないかという気持ち」に少なくともその瞬間はそう思うしかないのである。つまり、お互いの「敵対の気持ち」というのは、まさに「……雌雄が決してしまえば、やがてはうすれていくもの」であり、特に勝った方は、そういう傾向がより強く、一方、負けた方は、やがて「リベンジ」という意識が生じて来るかも知れないが、しかし、負けた瞬間は、もうどうにでもしろ、という気持ちになるしかない。つまり、勝った方は、まさに「全権」（つまり「全支配権」）を握ることになる一方、負けた方は、いやでも、それに従うしかない。——例えば、戦争などで「捕虜」になった時に、その場で殺されるのか、ひどい目に遇うのか、それとも、助かるのかは、すべて「相手」次第ということになるのである。

やがて、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔げてこう云った。「……己は検非違使の序の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」と云う。すると、老婆は、「……この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ」と答える。「……下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そして、また、前の憎悪が生じてきた」とある。

これは、自分の「予想」(或いは「期待」)が外れて、かえって「腹が立つ」という「心理」に近く、例えば、人肉を食べていたということであれば、それは、下人の「予想」を遙かに超えて、かえって「驚愕する」(或いは「恐怖心」)に襲われたかも知れない。つまり、われわれ人間というのは、自分の「予想」以下だと、「なあんだ」と、がっかりする気持ちになりやすく、一方、自分の「予想」以上だと、必ず、「驚く」という心理になるが、自分の「予想」通りや「予想」に近いと、やっぱりなという気持ちとともに、何かつまらないような気持ちにも襲われるものである。むろん、これらは、すべて「自分」(主観)が基準であり、それゆえ、厳密な「客観的な評価」とは、全く違うものである。

九、老婆の論理

さて、老婆は、次のようなことも云う。「……成程な。死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したものを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往っていた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買っていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、餓死するのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである」とある。

これは、非常に「面白い内容」であるので、その一つ一つを順に見てみたいと思う。まず、「……成程な。死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ」とある。つまり、老婆は、人間として「悪い事」をしているという「自覚」(倫理観)は、はっきりと持ち合わせているのである。次に、「……じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ」とある。これは、善い人間に「悪いこと」をするよりも、悪い人間に「悪いこと」をする方が、遙かに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などをそれほど受けずに済むということである。それに加えて、われわれ人間にとって、この世(俗世)で生き抜くということは、あるいは、現に生きているということは、何もかも「きれいな事」だけで済むはずがなく、多かれ少なかれ、誰でも「いいことも悪いこと」もしているということである。ましてや「社会環境」が「悪化」すれば、なおさらのことである。そして、その実例として、「……わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したものを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往っていた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買っていたそう」とある。

これは、まさに「詐欺」行為であるが、しかし、例えば、どのような商売であれ、多かれ少なかれ、消費者をうまくだまして、利益を少しでも上げようという傾向はあるのである。あとは、その「程度」問題であり、明らかに「犯罪行為」(つまり「刑法」)などに触れて、訴えられた者だけが、現実には罰せられているだけであり、あとの人たちは、うやむやになっているだけである。つまり、表面化しない「犯罪行為」などは、山ほどあると

いうことである。

それはともかく、老婆は、次のような結論を出すのである。「……わしは、この女のした事が悪いとは思っていない。せねば、餓死するのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしにする事も大目に見てくれるであろ」とある。——つまり、「生きる」ためには、「餓死しない」ためには、そうせざるを得ない。つまり、仕方がないことである、という結論である。この「結論」は、生きるための最低限の「衣食住」が保証されて、初めて、人間らしい「道徳観や倫理観」なども健全に機能するのであり、一方、生きるための最低限の「衣食住」さへも欠落してしまえば、つまり、このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない、というような状況にまで追い込まれた時には、人間らしい「道徳観や倫理観」などは、健全に機能し難いということである。だからと言って、「盗みや人殺し」などをそのまま「黙認する」わけにもいかない。それゆえ、「国や社会」（或いは「地方自治体」）などでは、生きるための最低限の「衣食住」などを保証する、まさに「社会保障」というものがあり、その一つに、例えば、「生活保護」、その他というようなものもあるのである。それゆえ、この老婆にも、生きるための最低限の「衣食住」などを保証してやれば、わざわざ女性の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜くというような、そのようなことをする必要もなくなるといふことである。

十、諸刃の剣

一方、下人は、「……せねば、餓死するのじゃて、仕方がなくしたことである」という、この老婆の話聞き、逆に、或る「勇氣」（それは「盗みをする勇氣」が生じて来て、「きつと、そうか」と、下人は嘲るような声で念を押し、そして、「……では、己が引剝をしよう」と恨むまいな。己もそうしなければ、餓死する体なのだ」と云って、「……すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。しばらく、死んだように倒れていた老婆は、やがて梯子の口まで、這って行った。そして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。下人の行方は、誰も知らない」といふところで終わっている。

*

*

この「部分」は、老婆の「論理」に基づいて、下人も、全く「同じこと」（つまり「盗み」を行なったということである。それでは、なぜ、下人は、老婆の着ていた「檜皮色の着物」を剥ぎとったのだろうか？ というのも、どこかで売れるほどの「品物」であったのか？ それとも、自分が着るためのものであったのか？ たとえどちらの「理由」であっても、なぜ、残酷にも「剥ぎとった」のだろうか？ ここにこそ、「作者」（つまり「芥川龍之介」）の言わんとする「思いや考え」などがはつきりとあるのであり、それは、次のようなことである。

つまり、老婆の考える「論理」には、確かに「一理」（つまり「成る程」という論理）はある。しかし、老婆の「論理」というのは、まさに「諸刃の剣」なのである。その「証、

「抛」に、実際、老婆も下人に着物を剥ぎとられ、丸裸になっているのである。——つまり、仕方なく、人を殺す、仕方なく、ものを盗む。それは、「する側」の論理に過ぎない。「される側」は、それではたまったものではない。——つまり、「作者」(それは「芥川龍之介」)であるが、彼は、この老婆の「論理」は、間違っていると言いたいのである。

*

*

例えば、人間社会が若しも「無法状態」になれば、それは、まさに「万人の万人による戦い」になってしまいうだろう。それは、自分が他人に対して何をしようと全くの自由であるが、同時に、他人も自分に対して何をしようと全くの自由であり、それゆえ、自分が他人を殺したり、他人の物を盗むことはすべて自由であるとともに、一方、他人も自分を殺したり、自分の物を盗むこともすべて自由になってしまいうのである。それでは、一時たりとも安心して生活できないだろう。そこで、お互いよく「話し合っ」て、何らかの「約束」(つまり「契約を結ぶ」)ことによつて、お互いの「財産や身の安全」などを図ろうとすることになるが、それが、すなわち、「社会契約説」であり、それを巨大な「国家」の手にゆだねるといふことである。そして、若しも誰かがその「約束」(つまり「契約」)を破った時には、その「被害」を受けた人たちに代わつて、巨大な「国家」が、その「犯罪者」たちを罰することになるのが、まさに「裁判制度」といふものになるのである。

もちろん、「裁判制度」によつて、この世の実に様々な人間の「罪や犯罪」などがすべて裁かれるわけではない。むしろ「何一つ根本的な解決にはならない」のである。なぜなら、例えば、「刑事裁判」といふのは、結局は、いわば「外的制裁」に過ぎないからである。それでは、誰がわれわれ人間の「罪や犯罪」などを裁くのだろうか？ それは、例えば、「神」や「仏」なのだろうか？ もちろん、それは、誰でもない、最終的には、まさに「自分自身」なのである。——つまり、「裁判」による「刑罰」といふのは、まさに「外的制裁」に過ぎないのに対して、一方、「内なる神」(それは、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろうもの)による「制裁」(いわば「良心の呵責」)こそは、まさに「内的制裁」であり、その「内的制裁」によつてこそ、われわれ人間の、自分が犯した「罪や犯罪」などは、最終的に裁かれているということである。それゆえ、老婆も下人も、たとえ「そうせざるを得ない状況」であつたとしても、最終的には「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などによつて、まさに「内なる神」(それは、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろうもの)による「内的制裁」を受けざるを得ないということである。

むしろ、一方では、「国や社会」(或いは「地方自治体」)などによつて、生きるための最低限の「衣食住」などを保証する、まさに「社会保障」といふものが必要不可欠になつて来るといふことであり、先の「老婆」にも、生きるための最低限の「衣食住」などを保証してやれば、わざわざ女性の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜くというような、そういうことをする必要もなくなるのである。しかし、若しもそれができないという「社会状況」であれば、「老婆」は、まさに強い者が弱い者を「支配(搾取)」して、容赦なく踏みつけるという「弱肉強食」の世界を生き続けるしかないのである。

*

*

杜^と
子^し
春^{ゆん}

杜子春

例えば、芥川龍之介の『杜子春』という作品も、非常によく知られている作品かと思うが、その「本文」は、次のようなものである。それは、「……或春の日暮です。唐の都の洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。若者は名は杜子春といって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽して、その日の暮しにも困る位、儚な身分になっているのです。その杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めていました」。するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人がありました。その老人は、「……お前は何を考えているのだ」と聞くと、杜子春は、「……私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と答える。すると、「……では、おれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」と。そこで、杜子春は、云われた通りにすると、一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になったのです。……

さて、大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしを始めました。しかし、そのような贅沢な日々は、三年で、再び、一文無しになつてしまいました。そこで、再び、洛陽の西の門の壁に身を凭せて、ぼんやり空を眺めていると、また、どこからやって来たか、片目眇の老人が、「……お前は何を考えているのだ」と聞くので、「……私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と。すると、「……では、おれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」と。——しかし、それも、三年で費い尽してしまう。また、杜子春は、同じ門の壁に身を凭せて、ぼんやり空を眺めていると、例の老人がやって来て、同じように、「……今度は、その腹に当る所を……」と云うが、杜子春は、「……いや、お金はもう入らないのです」。「……何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想がつかたのです」と。「……人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔しい顔さえもして見せはしません」と言う。そこで、杜子春は、「……私はあなたの弟子になつて、仙術の修行をしたいと思うのです。あなたは道德の高い仙人でしょう。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教えてください」と。それに対して、老人は、「……いかにもおれは峨眉山に棲んでいる、鉄冠子という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と。ここまですが、いわば「前半部分」になるかと思う。

一、若者と仙人

さて、この「作品」は、一体、どのような「作品」と問えば、それは、次のようなものである。まず、登場人物は、若い「杜子春」と老人の「仙人」との二人だけである。そして、若い「杜子春」というのは、一体、どのような存在かと言えば、それは、まさに「俗世間」にまみれている人間の「代表」のような存在である。つまり、われわれ人間という

のは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている存在であり、それは、例えば、「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、出世（社会的地位）欲、支配欲、独占欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々な「欲望（欲求）」があり、そして、それらの「欲望（欲求）」が思うように満たされれば、それなりの満足感を得、一方、思うように満たされなければ、逆に、「……不平、不満、嫌悪、怒り、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」などの感情に振りまわされてしまうものである。しかも、われわれ人間の実に様々な「欲望や感情」などがすべて満たされるはずもないので、それは、われわれ人間というのは、一方を得れば、また、一方を失うようにできているからである。例えば、杜子春のように、たとえ「巨万の富」を得たとしても、それによって得られるものと、もう一方では、それによっても得られないものがあり、それは、一般的には、いわゆる「四苦」（つまり「生・病・老・死」）などは、どうにもならないものであるとともに、また、いわゆる「人の心」というものも、少しも自分の「思い通り」にはならないものである。——例えば、その人がたとえ「従順に従っている」としても、その人の「心の中」ではない。つまり「何を思い、何を考えているか」などは、全く分からないものである。そして、杜子春は、それを人間の「薄情さ」と呼んでいるが、われわれ人間は、絶えずそういうものに振りまわされて生きていくということである。

一方、年老いた「仙人」というのは、一体、どのような存在かと問えば、それは、まさに「俗世」から解脱している人間の「代表」のような存在である。そして、この「仙人」は、本来であれば、「どうしたのだ？」と聞くところを、最初から、「……お前は何を考えているのだ」と質問をしている。それは、この「仙人」の最大の関心事は、「……杜子春が、今、何を考えているのか？」ということであったということである。それは、つまり、「……始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好きそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだ」と言っている。つまり、杜子春を見た時に、「……この若者は、どこか見どころがある。この若者なら、自分の弟子にしてもよいかも知れない」と思ったということである。つまり、「……この若者は、やがて人間に愛想をつかして、必ず、私に弟子入りしてくるだろうと、そう見越していた」ということである。

二、蛾眉山の魔性たち

さて、後半部分は、「……鉄冠子は、そこにあった青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文を唱えながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るように跨りました。すると、竹杖は忽ち竜のように、勢いよく大空へ舞い上って、晴れ渡った春の夕空を蛾眉山の方向へ飛んで行きました」。そして、その蛾眉山の断崖の大きな一枚岩の上に座ることになるが、仙人は、「……お前は、ここに座って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうと、決して声を出すのではないぞ。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と云いつけて、飛んで行きました。——そして、最初に現れるのが、いわゆる「猛虎と大きな白蛇」であり、杜子春は、「……そこにいるのは何者だ。黙っていると、命はないぞ」と云われても、ただ黙っていると、猛虎と白蛇は、杜子春めがけて同時に襲いかかって来るが、消えてしまう。次は、空一面が黒雲に覆われ、大きな雷鳴などが轟き渡

るが、じつと我慢していると、やがて消えてしまう。そして、今度は、武装した神将が現われ、「……返事をしないか。返事をしないと、約束通り命はとってやるぞ」と喚き、杜子春は、三又の戟で突き殺されてしまい、ついに息が絶えてしまうのである。

さて、ここまでの「内容」は、次のようなことになるかと思う。——つまり、われわれ人間にとつて、なぜ、「虎や蛇或いは雷鳴や神将」などが怖いと思うのかと問えば、それは、まさに自分の「生命」が危険にさらされる可能性が高いからである。それゆえ、「怖い」という思いに襲われるわけだが、その「怖い」という感情というのは、本来、すべて「自己防衛的な反応」であり、それは、まさに「自己愛」から生じるものであり、それは、それでよいのである。しかし、一方、その「自己愛」こそは、まさに「利己的自我」(つまり「エゴ」)の「源泉」そのものでもあり、そして、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)こそは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲にむさぼろうとしている「張本人」(本体)でもあるということである。それゆえ、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)が思うようにコントロールできずに、それに際限なく振りまわされてしまうと、実に様々な「揉め事や犯罪」などを起こすことにもなるということである。つまり、「利己的自我」(つまり「エゴ」というのは、一方では、自分の「身」を守っているものではあるが、一方では、自分を苦しめている「張本人」(本体)でもあるということである。だからこそ、宗教においては、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)をできるだけ弱めるような「考え方」になっているということである。

さて、死んでしまった杜子春の「肉体」からは、まさに「魂」が抜け出し、その「魂」は、いわゆる「地獄」へと墮ちてしまう。そして、そこには名高い「閻魔王」がいるが、その閻魔王は、「……何のために、蛾眉山の上へ座っていた。速に返答しなければ、地獄の呵責に遇わてくれるぞ」と居丈高に罵る。もちろん、杜子春は、それにもじつと黙っていたために、あらゆる「地獄の責苦」に遇うことになる。ここまでは、自分さえ我慢していれば、それで済む問題である。しかし、最後は、とうとう「姿は馬」ではあるが、その顔は「父母」という「瘦せた馬」が二頭連れて来られ、徹底的に「地獄の責苦」を与えられることになるのである。それを見ていた杜子春は、ついに耐えきれずに、「お母さん」と一言叫んでしまうのである。——そうすると、杜子春は、再び、夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり(一人)佇んでいるのでした。

三、新たな生活

さて、仙人は、「……とても仙人にはなれはすまい」と聞くと、「……いくら仙人になれた所が、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」と返答する。それに対して、仙人は、次のようなことを言う。

つまり、「……もしお前が黙っていたら、お前は即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ」とある。これは、一体、どういうことなのか? それは、次のようなことである。つまり、「仙人」というのは、いわゆる「人でなし」(つまり「人間でなくなる」ということではない。それゆえ、両親が実に様々な「地獄の責苦」などを受けているのを見ていながら、その人の「心」が少しを動かないとすれば、それは、まさに「人でなし」(つまり「人間ではない」ということになってしまっただろう。それでは、「仙人」とは、

一体、どのような存在になるのかと問えば、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めることから離れて、山深く、実に様々な「修行」などを何年も何十年も積み重ねることによって、何か特殊な「能力」などを身につけることになるとともに、いわゆるこの世や人間の本質などを鋭く見抜く「慧眼」などを兼ね備えた存在になるということである。そして、仙人は、「……お前はもう仙人になりたいという望も持っていないまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」と質問をする。それに対して、杜子春は、「……何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と答えるのである。これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めながら、まさに「満足感や幸せ感」などを得ようとするのが、まさに「俗世の人たち」であるとすれば、もう一方の、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着を捨てて、むしろ「欲」から開放されることによって、逆に、心の「平穏や充実感」（つまり「内的充実感」）などを得ようとするのが、まさに「修行僧や仙人或いは仏陀（如来）」ということになるのだろうか。そして、主人公の杜子春は、結果として、仙人にはなれなかったが、しかし、これからは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めるのではなく、むしろ、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着から離れて、いわば心の「平穏や充実感」などが得られるような「生き方」がしたいということである。そこで、いわば「ホームレスの杜子春」に対しては、仙人は、次のようなことを言うのである。——それは、「……おお、幸、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と。

*

*

さて、これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、作者（芥川龍之介）の「考え方」というのは、一方の極の「大金持ち」、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などをどこまでも貪欲に追い求めてやまないような人たちと、もう一方の極の「仙人」、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着をすべて捨てて、ただひたすら心の「平穏や充実感」などを得ようとしているような人たち、つまり、一方の極の「大金持ち」と、もう一方の極の「仙人」という、この「両極端」を避けた、いわば「中庸」、こそは、まさに「われわれ人間にとつて、最も幸せなことである」という「考え方」に立っているのである。

*

*

杜子春（参考文献）

一、若者と老人との出会い

或春の日暮です。唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者が
ありました。若者は名を杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽し
て、その日の暮しにも困る位、憐な身分になっています。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、繁昌を極めた都ですから、往来
にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当っている、油のような夕
日の光の中に、老人のかぶった紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾った色糸
の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで画のような美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めていました。空
には、もう細い月が、うらうらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思う程、かすかに
白く浮んでいるのです。「……日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、
泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身
を投げて、死んでしまった方がましかも知れない」。

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。
するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人があります。そ
れが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、「……お
前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。「……私ですか。私は今夜寝る所
もないので、どうしたものかと考えているのです」。

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしまし
た。「……そうか。それは可哀そうだな」、老人は暫く何事か考えているようでしたが、
やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、「……ではおれがよいことを一つ教
えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中
に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」、「……ほんと
うですか」と、杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。ところが更に不思議なこと
には、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。
その代り空の月の色は前よりも猶白くなって、休まない往来の人通りの上には、もう気の
早い蝙蝠が二三匹ひらひら舞っていました。（本文）

二、大金持ちになった杜子春は……

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉
通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘って見たら、大きな車
にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な
暮しを始めました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日
に四度色の変る牡丹を庭に植えさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を
集めるやら、錦を縫わせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂えるやら、

その贅沢を一々書いていては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂を聞いて、今までは路で行き合っても、挨拶さえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやつて来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。極かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏しているという景色なのです。(これは、山ほどあるお金の具体的な使い道の実例であるとともに、その大金持ちのところへと実に数多くの人たちが集まって来たということである。)

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になりました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなっていました。いや、宿を貸すどころか、今では腕に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。(例えば、杜子春という人間に心惹かれて集まったのであれば別であるが、いわば金に心惹かれて集まってきた人たちであれば、その金がなくなれば、自然と離れていくのは当然のことである。)

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目眇の老人が、どこからか姿を現して、「……お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、「……私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事をしました。「……そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」。老人はこう言つたと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。(もちろん、このようなことを繰り返すのには、老人にははつきりとした思惑があるからである。)

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。(相変わらず、杜子春という人は、この俗世の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲にむさぼることに取り憑かれていて、自分の人生を顧みるということが全くない状態にあるのです。)

ですから車に一ぱいにあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなつてしまいました。(本文)

三、仙人になりたいと……

さて、「……お前は何を考えているのだ」と、片目眇すがめの老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問いかけました。勿論もちろん彼はその時も、洛陽らくやうの西の門の下に、ほそぼそと霞かすみを破やぶっている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇たまたんでいたのです。「……私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つて居るのです」「……そうか。それは可哀あはれそうだな。ではおれが好いことを教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映うつつたら、その腹に当る所を、夜中に掘ほつて見るが好い。きつと車くるまに一ぱいの——」と、老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮さへりました。

「……いや、お金はどういららないのです」「……金はもういらぬか？ ははあ、では贅ぜい沢たくをするにはとうとう飽あきてしまったと見えるな」と、老人は審いしそうな眼まなこつきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。「……何、贅ぜい沢たくに飽あきたのじゃありません。人間にんげんというものに愛あい想そうがつきたのです」、杜子春は不平ふへいそうな顔をしながら、突つ慳けん貪どんにこう言いいました。「……それは面白いな。どうして又人間に愛あい想そうが尽つきたのだ？」と聞くと、「……人間は皆薄情はくじやうです。私が大金持たいきんぢになつた時には、世辞せじも追従ついでもしますけれど、一旦貧乏ひんぱふになつて御覽ごらんなさい。柔やさしい顔かほさえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持たいきんぢになつたところが、何にもならないような気がするのです」。

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出でしました。（これは、自分の思し惑まど通つうりになつて来たからである）。「……そうか。いや、お前は若い者に似合にあわず、感心かんしんに物のわかる男だ。ではこれからは貧乏ひんぱふをしても、安らかに暮くして行くつもりか」と聞くと、杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切きつた眼まなこを挙げると、訴うえるように老人の顔を見ながら、「……それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子でしになつて、仙術せんじゆつの修業しゆぎやうをしたいと思しうのです。いいえ、隠ひそしてはいけません。あなたは道德たうてきの高い仙人せんじんでしよう。仙人せんじんでなければ、一夜ひとよの内に私わたしを天下第一てんかだいいちの大金持たいきんぢにすることは出来ない筈はずです。どうか私の先生せんせいになつて、不思議ふしぎな仙術せんじゆつを教おえて下さい」と云うのであつた。（つまり、老人の思し惑まどとは、「……この若者わかしよは、どこか見みどころがある。この若者わかしよなら、自分の弟子でしにしてもよいかも知れない」と思しつたということである。）

老人は眉まゆをひそめたまま、暫しばらくは黙もくつて、何事なにことか考かん考かんしているようでしたが、やがて又につこり笑わらいながら、「……いかにもおれは峨眉山がひざんに棲すんでいる、鉄冠子てつくわんしという仙人だ。始めお前の顔かほを見た時とき、どこか物ものわかりが好よきさうだつたから、二度にどまで大金持たいきんぢにしてやつたのだが、それ程ほど仙人せんじんになりたければ、おれの弟子でしにとり立ててやろう」と、快ねがく願がを容ゆるれてくれました。杜子春は喜よろこんだの、喜よろこばないのではありません。老人の言葉ことばがまだ終はらない内に、彼は大地だいちに額かぶをつけて、何なに度も鉄冠子てつくわんしに御時宜おじぎをしました。「……いや、そう御礼ごれいなどは言いつて貰もらうまい。いくらおれの弟子でしにしたところが、立派りつぱな仙人せんじんになれるかなれないかは、お前次第おまへしだいで決きまることだからな。——が、ともかくもまずおれと一ひとしよに、峨眉山がひざんの奥おくへ来て見るが好よい。おお、幸さいわい、ここに竹杖たけづえが一本落おちている。では早速さつそくこれへ乗のつて、一ひと飛びに空そらを渡わたるとしよう」と云うのであつた。

鉄冠子てつくわんしはそこにあつた青竹あおたけを一本拾ひろい上げると、口くちの中に咒文じゆもんを唱となえながら、杜子春と一ひとしよにその竹たけへ、馬うまにでも乗のるようように跨またりました。すると不思議ふしぎではありませんか。竹杖たけづえは忽たちち竜りゆうのようように、勢いきおい大空おほぞらへ舞まい上あつて、晴はれ渡わたつた春はるの夕空ゆふぞらを峨眉山がひざんの方角かたがしへ飛とんで行いきました。——杜子春は胆きもをつぶしながら、恐おそる恐おそる下したを見下みくだしました。が、下したには唯青ただあおい山々やまが夕明ゆふあかりの底そこに見みえるばかりで、あの洛陽らくやうの都みやこの西にしの門かどは、（とうに霞かすみに紛ま

れたのでしよう)どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱い出しました。(これは、大空を自由に飛びまわる、その「心の高揚《喜び》」から、自然と自分の「好きな歌」を高らかに唱い出したということになるのだろう。)

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。

袖裏の青蛇、胆気粗なり。

三たび岳陽に入れども、人識らず。

朗吟して、飛過す洞庭湖。(本文)

四、蛾眉山の魔性たち

さて、二人を乗せた青竹は、間もなく蛾眉山へ舞い下りました。そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光っていました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やつと耳にはいるものは、後の絶壁に生えている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、「……おれはこれから天上へ行って、西王母に御眼にかかって来るから、お前はその間にここに坐って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たとえどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだど覚悟をしる。好いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と云いました。「……大丈夫です。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています」と答えると、「……そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」と云い、老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨って、夜目(夜間にもものを見る目)にも削ったような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

*

*

これはもちろん、杜子春一人だけを残し、蛾眉山の様々な魔性たちの「試練」を受けさせて、それに耐えられるかどうか(つまり「仙人になれるかどうか」)を見ようとしているのである。

猛虎と白蛇の出現

杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静に星を眺めていました。するとかれこれ半時ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に声があつて、「……そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしませんでした。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、「……返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇しつけるのです。杜子春は勿論黙っています

た。——と、どこから登って来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思うと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。(この「猛虎と白蛇」の組み合わせは、実に「映像的にも美しい」場面になるかと思う。)

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うのか、暫くは睨合いの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなってしまうと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待っていました。

黒雲と天雷の出現

すると一陣の風が吹き起つて、墨のような黒雲が一面にあたりをどさずや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄しく雷が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑のような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐っていました。風の音、雨のしづき、それから絶え間ない稲妻の光、——暫くはさすがの峨眉山も、覆るかと思つた位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、まっ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。(この場面も映像的に壮大で自然の驚異に充ちた場面になるかと思う。)

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯に違いありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

武装した神将の出現

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあるという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉の戟を持っていました。が、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を噴らせて叱りつけるのを聞けば、「……こちら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしている所だぞ。それも憚らずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と云うのです。(これは、いわば聖地になぜ不法侵入して来たかと問い詰めているのである。)しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然と口を噤んでいました。「……返事をしないか。——しないな。好し。しなれば、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属たちが、その方をずたずたに斬ってしまうぞ」。——神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きま

した。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充滿ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。(つまり、「十二神将」にはそれぞれ無数の「神兵」がいるのだから、それは、各「神将」にそれぞれ七千、総計八万四千の眷属夜叉を率いているのである。)

この景色を見た杜子春は、思わずあつと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒ったの怒らないのではありません。「……この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ」と、神将はこう喚くが早い、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のように消え失せた後だったのです。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れていました。(本文)

* * *

さて、この場面は、猛虎や白蛇或いは黒雲や天雷の場合とは違って、神将は、三叉の戟を閃かせて、(実際)一突きに杜子春を突き殺してしまふ。すると、今度は、その「肉体」から「魂」だけが抜け出して、やがて、地獄へと墜ちていくという新たな「試練」《展開》へと向かつて行くわけだが、これを「ゲーム」に喩えて言えば、易しい場面からより難しい場面へと次から次へと「ステージ」をクリアしながら、果たして最後まで辿り着けるかどうか、そして、最後まで辿り着ければ、正式な「弟子」となって、そこから「仙人」へと向かう新たな長い、「修行の道」が開けるといふことになるのか、そのような展開へと向かうのである。

五、魂は、地獄へと……

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに(上向きで)倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴道という道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がぴゅうぴゅう吹き荒んでいります。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉のように、空を漂って行きましたが、やがて森羅殿という額の懸った立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にはいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを取り捲いて、階(階段)の前へ引き据えました。階(階段)の上には一人の王様が、まっ黒な袍に金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂に聞いた、閻魔大王に違いありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪いていました。「……(こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐つていた?)」

閻魔大王の声は雷のように、階(階段)の上から響きました。杜子春は早速その間に答えようと思ひましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな」という鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れたまま、唾のように黙っていました。すると閻魔大王

は、持っていた鉄の笏を挙げて、顔中の鬚を逆立てながら、「……その方はここをどこだ
と思う？」速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責に遇わせて
くれるぞ」と、威丈高に罵りました。

が、杜子春は相変らず唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの
方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に畏って、忽ち杜子春を引き
立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、剣の山や血の池の外にも、焦熱地獄という焰の谷や
極寒地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、
代る代る杜子春を抛りこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、
焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵に撞かれるやら、
油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸われるやら、熊鷹に眼を食われるやら、――そ
の苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦に遇わされたのです。そ
れでも杜子春は我慢強く、じつと歯を食いしばったまま、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返ってしまったのでしよう。もう一度夜のような空を
飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を階（階段）の下に引き据え
ながら、御殿の上の閻魔大王に、「……この罪人はどうしても、ものを言う気色がござい
ません」と、口を揃えて言上しました。（恐らく、ここまで耐えた人間は珍しいのだろう。）

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見え
て、「……この男の父母は、畜生道に落ちて居る筈だから、早速ここへ引き立てて来い」
と、一匹の鬼に言いつけました。（これは、今までどこまで耐え忍んだ人間は殆ど居なかつたので、さすがの閻魔大王も眉をひそめて、暫く思案に暮れることになったのだろう。）

鬼は忽ち風に乗って、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二
匹の獸を駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。その獸を見た杜子春は、
驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえは、それは二匹とも、形は見すばらし
い痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。「……こら、そ
の方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその
方の父母に痛い思いをさせてやるぞ」と云う。（これが結果として、杜子春にとっての「最
大の試練」になって行くのである。）

杜子春はこう嚇されても、やはり返答をしませんでした。「……この不孝者めが。その
方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いと思っっているのだな」、閻魔大
王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。「……打て。鬼ども。その二匹の畜生を、
肉も骨も打ち砕いてしまえ」と。鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭をとって
立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未積なく打ちのめしました。鞭はりゅうりゆ
うと風を切つて、所嫌わず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、――畜生にな
った父母は、苦しそうに身を悶えて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程嘶
き立てました。「……どうだ。まだその方は白状しないか」と、閻魔大王は鬼どもに、暫
く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、
肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階（階段）の前へ、倒れ伏していたのです。

杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊く眼をつぶっていました。
するとその時彼の耳には、殆声とはいえない位、かすかな声が伝わって来ました。「…

…心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言いたくないことは黙って御出で」と。それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。……… (本文)

*

*

さて、この「お母さん」には杜子春の「万感の思い」が込められているとともに、この「お母さん」という言葉を発することで、杜子春の「頭の中」(或いは「心の中」)には、再び、本来の「人間らしい心」が甦つてきて、杜子春は、初めて「自分の人生」(それは人間としての「生き方」)というものを根本から問い直し考え直す「切っ掛け」(チャンス)を得たのである。そのように仕向けたのは、誰でもない「老人」(仙人)ではあるが、その「老人」(仙人)は、杜子春を自分の「弟子」にしてもよいと思っていたが、しかし、「……どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」と言っている。これは、「……いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな」ともある。——つまり、「……杜子春を自分の『弟子』にしてもよい」というのは、いわば仙人へのほんの「入り口」に過ぎず、一方、「……立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだから」と言うのは、立派な「仙人」になるためには、それこそ何十年という極めて「厳しい修行」の毎日の積み重ねがどうしても必要不可欠になるとともに、たとえ「仙人」になれたとしても、例えば、峨眉山のような人里離れた奥深い山奥に一人住むような生活が、果たして、その人にとって真に人間としての「幸せ」になるのかどうかという問題も残るのである。——つまり、一方の「大金持ち」、一方の「仙人」というのは、どちらも「極端」になり過ぎているのであり、人間の「幸せ」というのは、むしろ「中庸」(これは「両端を極め尽くして、中庸を生きる」)にこそあるというのが、いわば「作者」(つまり「芥川龍之介」)の「考え方」になるかと思う。

六、新たな生活

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでいたのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「……どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」と、片目眇の老人は微笑を含みながら言いました。「……なれませんが、しかし私はなれなかったことも、反って嬉しい気がするのです」。

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。「……いくら仙人に

なれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」と云う。

「……もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急に厳な顔になって、じっと杜子春を見つめました。「……もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思っていたのだ。——お前はもう仙人になりたいという望も持っていない。大金持になることは、元より愛想が付きた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」と聞くと、「……何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩っていました。「……その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇わないから」と、

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、(いわば「ホームレスの杜子春」に対して)、「……おお、幸、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。(完)

*

*

蜘蛛の糸

蜘蛛の糸

例えば、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』という作品は、非常によく知られている作品であり、しかも、極めて短い作品で、二、三十分もあれば、誰でも読めてしまうほどでありながら、いわば「一つの世界」（或いは「一つの物語」）を創り出しているという点に於いては、まさに「優れた作品」の一つということになるのかも知れない。……

さて、その「本文」であるが、それは、次のような非常に「美しい文章」から始まるものである。それは、「……或る日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、その真ん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう……」とある。

これは、やはり「美しい文章」であり、いかにも蓮の花咲く「極楽」のゆつたりとした、秀囲気の満ち溢れた感じがよく出ている文章になるかと思う。さて、その次は、「……やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当つて居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます」とある。この部分も、非常に「美しい描写」であり、その蓮池の透き徹つた水晶のような「水の中の様子」がはつきりと目の前に見えて来るような感じである。そして、「……するとその地獄の底に、犍陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しよに蠢いている姿が、御眼に止りました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火を付けたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、『いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ』と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます」。

さて、「引用文」が長くなつたが、それは、一体、なぜかと問えば、それは、「本文」を直接読んで、その「文章」を深く味わつてもらいたいからである。つまり、「文章の美しさ」を感じてもらいたいということである。すなわち、「読書」とは、一体、何なのか、という「根本問題」に対して、それは、ただ単に「表面的な意味内容」が分かれば、それでもう十分ということではなく、むしろ、一つは、「文章」そのものの「美しさ」を感じてもらいたいということであり、また、一つは、文字通り、文章の「一字一句」をできるだけ「丁寧かつ厳密」に深く読んでは、その真の「意味合い」を厳密に読み取ってもらいたいということである。そして、もう一つは、古今東西の真に優れた「作者の魂」とめぐり逢つては、その真に優れた「作者の魂」とできるだけ深く交わることによって、最終的には、その作者の「魂の鼓動」（つまりは「魂の声」）をできるだけ厳密に聴き分けてもらいたいとともに、もう一つは、自分自身、真に「内的成長」することによって、最終的には、「……自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう『精神の自立』した一人の人間になつてもらいたい」ということでもあるのです。もちろん、「作品」を気楽に楽しむことも、大事なことではあるが……。

一、お釈迦様の想い

さて、『蜘蛛の糸』の「話」に戻りたいと思うが、それは、「……御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました」と続くのである。

まず、ここまでの「本文」は、いわゆる「極楽の世界」の描写であり、ある朝、お釈迦様は、白い花咲く蓮池のそばをお散歩されている時に、その池のふちに御佇みになり、たまたま蓮池の蓮の葉の間の、その透き徹った水晶のような「水の中の様子」をご覧になってみると、そこは、まさに「地獄の世界」の三途の河や針の山の景色、その他の様子が、まるで覗き眼鏡で見えるように、はっきりと見えてきて、しかも、その地獄の底で、犍陀多という男の、ほかの罪人と一しよに蠢いている姿が、お釈迦様の「お眼に止った」ということである。——しかも、その犍陀多という男は、人を殺したり、また、家に火をつけたりの大泥棒であったが、ただ一つだけ「善い事」をしたことがあり、それは、林の中を歩いている時に、たまたま路ばたを蜘蛛が一匹這って行くのを見た時、すぐに踏み殺そうと思ったが、いや、待て、可哀想だと思ひ直して、思い止まり、その「生命」を助けたことがあったという、そのことを想い出した、お釈迦様は、その「善い事」をしたことの報いとして、いわゆる銀色の「蜘蛛の糸」を地獄の底へと一本垂らして、地獄の底にいる犍陀多という男を救い出してやろうとお思いになったということである。もちろん、このような「内容」から、まさに『蜘蛛の糸』という「題名」になったということである。

ただ、不思議に思うことは、たった「一匹の蜘蛛」を助けただけで、どうしてお釈迦様は、極悪人の「犍陀多」という男を地獄から救い出してやろうとお思いになったのだろうか？ それは、たった「一匹の蜘蛛」であつても、その一般には取るにならぬと思われている「蜘蛛の生命」というものを、まさに「尊し」と思う心があるとすれば、そこにはまだ「改心（更正）する可能性」が僅かでも残されているということであり、それゆえ、お釈迦様は、その極悪人の「犍陀多」という男に、たった一度だけ、まさに地獄から抜け出す「チャンス」をお与えになったということである。しかし、それは、決して容易なことではなく、地獄の底から極楽まで上つていくには、まさに気が遠くなるほどの「距離と本人の努力」とが必要不可欠になって来るということである。

二、地獄からの脱出

それでは、次の「本文」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……こちらは地獄の底の血の海で、ほかの罪人と一しよに、浮いたら沈んだりしている犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上つているものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、そ

の心細さと云つたらごさいません。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞えるものと云つては、ただ罪人がつく微かすかな嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責せめく苦に疲つかれてはてて、泣声を出す力さえなくなつてるのでございましょう。ですからさすが大泥坊の犍かん陀多も、やはり血の池の血に咽ひびびながら、まるで死にかかった蛙かわずのように、唯ただもがいてばかり居おりました。

ところがある時の事でございます。何なに気なく犍かん陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗やみの中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛くもの糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るでございせんか。犍かん陀多はこれを見ると、思わず手を拍うつて喜びました。この糸に縋すがりついて、どこまでものぼつて行けば、きっと地獄からぬけ出せるに相違ちがひございせん。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。そうすれば、もう針の山へ追おい上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございせん。

こう思おもいましたから犍かん陀多は、早速その蜘蛛くもの糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切つてるのでございます。——しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦あせつて見た所で、容易に上へは出でられません。ややしばらくのぼる中に、とうとう犍かん陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまいました」とある。

*

*

さて、ここまでの犍かん陀多は、ただひたすら上へ上へのぼろうとただひたすら一生懸命に努力をしている状態であり、このような状態を最後まで続けていたら、或いは、地獄から抜け出て、さらには極楽へも入ることができ得たかも知れません。しかし、犍かん陀多は、何気なく下を見てしまったのである。そして、自分は、地獄の底からは遙かに上の方にいることに気づくのである。すると、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた」と笑うのであった。——この時、犍かん陀多の「心の中」には、再び、極悪人だった頃の、それは、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされていた頃の、まさに「自我エゴな心」が甦よみがえつてしまったのである。そして、遙か下の方を見ると、「……教限かすかぎりもない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻あひの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼつて来るではございせんか。犍かん陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いので、暫しばくは唯ただ、大きな口を開あいたまま、眼ばかり動かし居おりました。自分一人でさえ断きれそうな、この細い蜘蛛くもの糸が、どうしてあれだけの人数にんずの重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断きれたと致いたしましたら、折角ここへまでのぼつて来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落さかおちしに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、そう云う中うちにも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這はい上つて、細く光っている蜘蛛くもの糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中うちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに断きれて、落ちてしまうのに違いありません。そのような不安と焦あせりから、終ついにに、犍かん陀多は、大きな声を出して、「……こら、罪人ども。この蜘蛛くもの糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体誰たれに尋たずいて、のぼつて来た。下りろ。下りろ」と喚わめいてしまうのである。それは、まさに「言つてはいけない言葉を言つてしまった」ということである。「……その途端でございます。今

まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぷつりと音を立
てて断れては、まっさかさまに落ちてしまい、後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと
細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでした」とある。

三、再び、地獄へと

さて、犍陀多は、再び、地獄の底へと落ちてしまいました。それは、誰のせいでもない、
それは、彼自身の「心」（つまりは「自我な心」）のせいなのです。お釈迦様は、極悪人
の犍陀多という男の「心の中」にも、いわゆる「善き心」があることを観て取りました。
だからこそ、お釈迦様は、たった一度だけ、まさに地獄から抜け出せる「チャンス」をお
与えになったのです。それは、これほどの「極悪人」でも、その「善き心」に導かれて、
自ら自分を「救い出す」ことが、果たしてでき得るだろうか、むしろ「お試し」になっ
たのでございます。——最初、犍陀多は、この「地獄の底」から抜け出したい一心から、
ただひたすら上へ上へのぼろうとただひたすら一生懸命に努力をしている状態であり、
そのような状態を最後まで続けていたら、或いは、地獄から抜け出て、さらには極楽へも
入ることができ得たかも知れません。お釈迦様は、むしろ「それを期待した」のでござい
ます。なぜなら、誰の心にも「善き心」は、生まれながらに持ち合わせているからです。
ところが、われわれ人間というのは、俗世間に忙しくまみれているうちに、実に様々な「欲
望や感情」などに振りまわされてしまい、本来の「善き心」（それは「無色透明な心」）
は、実に様々に「変形」（変色）してしまい、本来の「自分自身」（つまり「善き心」）を
見失っている状態にあるのです。それゆえ、その実に様々に「変形」（変色）してしまっ
た「自分の心」を、もう一度、いわゆる本来の「善き心」（それは「無色透明な心」）へ
と戻してやることこそ、まさに「極楽への道」にほかならないのである。

さて、「本文」の最後は、「……お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終
をじっと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしま
いますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分
ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相応な罰をう
けて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御眼から見ると、浅間しく思召された
のでございましょう。——しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しませ
ん。その玉のような白い花の、その真ん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂
が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなつたのでございましょう」。

一寸ちの

蓮の池への

蜘蛛の糸

藪やぶ
の
中

藪の中

例えば、芥川龍之介の数多くの作品の中には、映画でもよく知られている『藪の中』という極めて短い「短編小説」があるが、その「本文」は、次のようなものである。

一、検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があったのでございます。あつた処でございすか？ それは山科の駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび鳥帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございすから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳（くすんだ赤）に滲みたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたっけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄が一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも榎が一つございまして。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬などは、入れない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たつて居りますから。（本文）

*

*

まず、最初に、「検非違使」という言葉が出て来るが、これは、平安初期から置かれ、京中の「非法・非違」を檢察し、今の「警察官と裁判官」とを兼ねたような存在であり、その権限は、極めて強大であつたとある。それゆえ、ここでは、いわば「取り調べ官」ということでよいのではないかと思う。そして、最初は、その「検非違使に問われたる木樵りの物語」という書き出しになっているが、それを「今日風」に表現すれば、いわば「死体の第一発見者（木樵り）の証言」ということであり、それを「要約」すると、次のようになるかと思う。つまり、「……あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。死骸は縹の水干に、都風のさび鳥帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございす」とある。（この「胸もとの突き傷」は大事であり、死因は、胸を「一突き」されたからであり、決して「太刀で斬られた」からではないのである。）

次に、太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。死骸のまわりにあつたものは、杉の根がたに縄が一筋と榎が一つ落ちて居りました。が、「……草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません」とある。これは、いかにも二人（男同士）が太刀で争つたように見せてはいるが、実は、そうではなく、可能性があるのは、一つは、盗人

(多襄丸)が「侍」を無理やり組み伏せて縛り付けた時か、そして、もう一つは、「……男は杉の根に縛られている。——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐から出してたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見つてありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹を突かれたでしょう。いや、それは身を躲したところが、無二無三(がむしやら)に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました」という時か、恐らく、この時に、お互い激しく争つて、「……草や竹の落葉は、一面に踏み荒された状態になつた」のではないかと思う。

また、「……馬はいなかつたか？ あそこは馬など入れない所でございます」と答えている。もちろん、この木樵りの証言に「うそ」は一つもないのであり、その場で見たままをそのまま素直に語っているものである。

二、検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございます。よう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は傘子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ菰重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪(ほうしがみ)の馬のようでございます。丈でございますか？ 丈は四寸もございませんか？ ——何しろ沙門(しゃもん) (修行僧)の事でございますから、その辺ははっきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたのは、ただ今でもはっきり覚えて居ります。

あの男がかようなうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命なぞは、如露亦如電(じよろやくにょでん) (人の命は露の如く儚く、稲妻の如く一瞬のうちに消え去る)に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。(本文)

さて、次は、「検非違使に問われたる旅法師の物語」であるが、それを「要約」すると、次のようになるかと思う。つまり、「……あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は傘子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。馬は月毛の、——確か法師髪(ほうしがみ)の馬のようでございますが、何しろ沙門(しゃもん) (修行僧)の事でございますから、確かなことはわかりません。また、男は、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたのは、今でもはっきり覚えて居ります」と証言をしている。もちろん、この証言にも「うそ」は全くなく、すべてほんとうのことである。

三、検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取った男でございませうか？ これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人(ぬすびと)でございませう。もつともわたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございませう、栗田口

の石橋の上に、うんうん呻って居りました。時刻でございませうか？時刻は昨夜の初更頃でございませう。いづぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携えて居ります。さようでございませうか？あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございませう。革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございませう。はい。馬もおつしやる通り、法師髪の月毛でございませう。その畜生に落とされるとは、何かの因縁に違いございませう。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いたまま、路ばたの青芒を食って居りました。この多襄丸と云うやつは、浴中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございませう。昨年の秋鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりませう。差出がましゅうございませうが、それも御詮議下さいませう。(本文)

さて、次は、「検非違使に問われたる放免の物語」であるが、その本文を「要約」すると、それは、「……わたしが搦め取った男でございませうか？これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人であり、浴中に徘徊する盗人の中でも、女好きなやつでございませう。そして、わたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございませう。栗田口の石橋の上に、うんうん呻って居りました。携えていたものは、自分の太刀、革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、あの男(侍)が持っていたものでございませう」と答えている。これにも「うそ」は全くないのである。(ただ、気になるのは、最初、征矢は二十本あったはずだが、十七本になっている。また、侍の「太刀」も持ち逃げしたはずだが、役人に搦め取られた時には、それを携えてはいなかった。だとすれば、恐らく、売り飛ばして(当面の間の)金に換えたということになるのだろう。)

四、検非違使に問われたる姫の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございませう。が、都のものではございませう。若狭の国府の侍でございませう。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございませう。いえ、優しい気立でございませうから、遺恨なぞ受ける筈はございませう。

娘でございませうか？娘の名は真砂、年は十九歳でございませう。これは男にも劣らぬくらい、勝気な女でございませうが、まだ一度も武弘のほかに、男を持った事はございませう。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございませう。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立ったのでございませうが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめませう。でも、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございませうから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいませう。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございませう。婿ばかりか、娘までも……(跡は泣き入りて言葉なし)(本文)

*

*

さて、今度は、「検非違使に問われたる姫の物語」であるが、それは、「……はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武広、年は二十六歳でございます。優しい氣立でございますから、遺恨など受ける筈がございません。娘でございますか？ 娘の名前は真砂、年は十九歳でございます。これは男に劣らぬくらい、勝気な女でございますが、まだ一度も武広のほかに、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。武広は昨日娘と一しよに、若狭へ旅立ったのでございます。……」とある。ここまでは、すべてほんとうのことである。

それは、なぜかと問えば、それは、「媼」を除いて、ほかの人たちは、被害者（死者）とは直接、何らの「利害損得関係」（或いは「愛憎関係」）などの全く絡んではない「第三者」（つまり百%「赤の他人」）だからである。それゆえ、「うそ」を附く理由が基本的には「全くない」ということである。

五、多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されませぬ。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科の駅路（駅や宿のある街道）では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある。この古塚を発いて見たら、鏡や太刀が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪の中へ、そう云う物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けていたのです。

わたしは藪の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渴いていますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っている。と云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありません。わたしはこれも実を云えば、思う壺にはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町（一町は約一〇九尺）ほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまいました。縄ですか？ 縄は盗人の有難さに、いつ堀を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張られば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星に当たったのは、申し上げるまでもありません。女は市女笠を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいって来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛られている。——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐から出していたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見ただ事ありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹を突かれたでしょう。いや、それは身を躲したところが、無二無三（がむしやら）に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——それも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなたの方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなたの方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなたの方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去る

まいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしると云いました。(杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです)。男は血相を変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っっているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけです。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉に、断末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打ちを始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思っっていますから、どうか極刑に遇わせて下さい。(昂然たる態度)(=自信に満ちて誇らしげなさま)(本文)

多襄丸の自供

さて、「本題」は、ここからであり、それは、いわゆる旅姿の「侍夫婦」(二人)と「名高い盗人」(多襄丸)との間で起こった、まさに「藪の中」での出来事に対する「供述」が、それぞれ一人一人違うところである。その「内容」には、非常に「興味深い」ものがあり、それゆえ、敢えてその「謎解き」を試みたいと思う。——まず、「多襄丸の自供」であるが、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、傘子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのです。わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました」とある。そして、ここまでの「自供」は、冒頭の「……あの男を殺したのはわたしです」という言葉以外は、すべてほんとうのことになるかと思う。

続けて、多襄丸は、次のようにも語るのである。それは、「……何、男を殺すなぞは、大した事ではありません。わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている。——しかしそれでも殺したので

す。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません」という「内容」である。これは、一体、どういう「意味合い」の言葉になるのだろうか？　まず、「……何、男を殺すなどは、大した事ではありません。わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが」とあり、ここまでは「普通一般的」であるが、普通一般的でないのは、次からの言葉であり、それは、「……あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きています。——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません」という内容であり、これは、事件とは直接何の関係もない、むしろ「役人」(或いは「世間一般」)を批判している言葉である。ここに「盗人」(多襄丸)という人の「ものの考えた方」が表れていると共に、これは、まさに「作者」(つまり「芥川龍之介」)という人の「もの考え方」が表れているところでもあり、この「盗人」(多襄丸)という人は、自分の太刀で直接「男は殺してはいない」が、しかし、結果として、自分のせいでも、まさに「相手の男を殺すような結果になってしまった」ということである。だからこそ、冒頭で、「……あの男を殺したのはわたしです」と語るが、それは、この「盗人」(多襄丸)という人の、いわば「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)からの言葉と言ってもよいのだろう。

さて、「本文」は、次のように続く。「……しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです」。そこで、一計を案じて、それは、藪の中に「宝」が埋まっていると「嘘」をついて、男を「藪の中」へと誘い、そこで男を不意にいきなり組み伏せて、一本の杉の木が根がたへ、括りつけてしまうのである。一方、女は、馬から下りずに待っていたが、「盗人」(多襄丸)は、戻ってきて、男が急病を起こしたと嘘をついて、女を「藪の中」へと連れて来る。「……ところが、そこに来て見ると、男は杉の根に縛られている。女は、それを一目見るなり、いつのまに懐から出していたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見つかりません。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀を抜かずに、とうとう小刀を打ち落としました。そして、わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、その男が見ている前で、女を手に入れる事は出来たのです」と。ここまでに「うそ」はない。

そして、最大の「問題」は、この「次の段階」で起こるのである。それは、多襄丸は、男は殺さずにすみ、また、女は泣き伏している状態であるので、このまま藪の外へと逃げようとする、「……女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋りつき、切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男になつれ添いたい、——そうも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました」とある。これらの「言葉」は、どこまでが「ほんとう」であり、どこからが「うそ」なのかは、今の段階では判別しがたいが、敢えて結論から言えば、実は「うそ」であり、この「うそ」は、後述の卑怯な「殺し方」はしたくないということから、男の縄を解いて、一対一の「対決」へと展開させるための伏線になるのである。

さて、「……こんな事(相手の男を殺したい)」と申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないから

です。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい。わたしの念頭にあったのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました」とある。

この「本文」のその中で、「……わたしは、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい。——わたしの念頭にあったのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう」とあるが、この「部分」だけは、まさに「ほんとうのこと」であり、その証拠は、夫（侍）の供述の中でも、次のように語っているからである。つまり、「……盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。（中略）、妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶をした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ。（中略）、そして、妻は確かにこう云つた。——「……ではどこへでもつれて行って下さい」とあるからである。

*

*

さて、「本文」では、「盗人」（多襄丸）は、男を殺したいという気持ちに襲われるが、しかし、卑怯な「殺し方」はしたくないということ、男の縄を解いて、一対一の「対決」ということになり、「……わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。わたしは今でもこの事だけは、関心だと思つて居るのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから」と言う。

この「部分」は、恐らく、「うそ」であると言つてもよいのだろう。なぜなら、後述の「夫」は、この問題には全く触れていないからである。それでは、なぜ、多襄丸は、このような「嘘」をついたのだろうか？ それは、いわば「男の面目」（名誉）のためである。というのも、この「夫」は、目の前の「欲」（つまり「宝」）に目が眩んで、やすやすと多襄丸の罠にはまり、杉の根がたに縛られただけではなく、いわば「愛する妻」を目の前で「手ごめ（辱め）」を受けるのを助けることもできず、ただただ傍観していたということ、武士として余りにも情けない、これ以上の「屈辱的なこと」はないのであり、そこで、多襄丸は、相手の「夫」は、武士として立派に戦つて死んで行つたという、いわば「武士の面目」が立つように、まさに「嘘」をついたということである。それでは、なぜ、そのような「余計なこと」をしたのかと問えば、それは、やはり、結果として、「彼を死へと追いやつたのは、自分に他ならない」という、そういう「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）があったからであろう。

六、清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまおうと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだがり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやつと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません」。

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂けそうな胸を抑えながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀だけは、わたしの足もとに落ちています。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。——「……ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します」。

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ」と一言云ったのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしょうか。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢にはなりません。(寂しき微笑)、わたしのように腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、

一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——（突然烈しき歎歎）とある。（本文）

女（妻）の自供

さて、今度は「清水寺に来れる女の懺悔」というものであり、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……その男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは夫の側へ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようもない輝きが、宿っているのを覚りました。——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない。——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、とうとう気を失ってしまいました」とある。

つまり、女（の主観）は、夫の「眼の中」に「自分を蔑む心」を見たということである。それは、一体、なぜなのか？ ふつうに考えれば、一つは、手ごめになる前になぜ自害しなかったのか？ 或いは、その後、なぜ自害しようとしなかったのか？ そして、もう一つは、そもそも本気で「拒む気」があったのかどうかという疑いも生じやすい。しかし、それらは、いずれも違う。なぜなら、まず、妻は、気性の激しい女性であり、最初は、懐から小刀を抜き出し果敢に戦ったが、最後は、とうとう小刀を下に打ち落とされてしまう。つまり、この時は本気で戦っているのであり、そのあと、男に手ごめにされてしまうが、その時の「心的状態」は、一体、どのようなものだったかは、何とも推測しがたいが、それを敢えて推測してみると、恐らく、気の強い（自尊心の強い）女性であるので、やはり「屈辱的な思い」は強かったとともに、夫の前であるので、なおさら恥ずかしさや悔しさなどは深かったかと思う。それゆえ、夫は、妻のことを責めることはできないのである。それよりも、むしろ、妻を助けてやれない自分のふがいなさや責められたに違いない。しかも、夫は、「優しい気立の人」であるので、妻が「自害」することなどは、決して望んではいなかったのである。それでは、なぜ、妻は、夫の「眼の中」に「自分を蔑む心」を見たのだろうか？ それは、次のようなことである。つまり、妻が男（盗人）に突然、「……落葉の上へ、蹴倒される」のは、（この場面は、まだ出て来てはいないが）、実は、妻が、「……あの人（夫）を殺して下さい」と何度も叫んでいる時なのである。その時に、妻は、まさに夫の「眼の中」に「自分を蔑む心」を見たということである。

さて、気を失い、再び、目を覚ました時には、男は、もうそこにはいなかった。夫が縛られているだけである。もし、この「言葉」がほんとうであれば、夫と盗人が「真剣で戦った」というようなことは、まさに「大うそ」になる。もちろん、女も「うそ」を言っている可能性もあるので、どちらがどうとは言えない。そして、「……わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり、冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、

悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。『……あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られませんか。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません』と、わたしは一生懸命に、これだけのことを云いました」とある。そして、妻は、夫の「太刀」を探すが、どこにもなく、下に落ちていた小刀を手に取って、再び、「……ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します」と言うと、夫は、やつと唇を動かして、もちろん、ものが言えない状態であり、声は少しも聞えてはいないが、その言葉の意味を覚りました。「……夫はわたしを蔑んだまま、『殺せ』と一言云ったのです。わたしは、ほとんど夢うつつの内に、夫の縲の水干の胸へ、づぶりと小刀を刺し通しました」とある。

しかし、これは、やはり「おかしい」のである。なぜなら、なぜ、最初に夫の縄を解き、そして、話が出来るようにしなかつたのか？ ふつうであれば、そうするだろう。その後で、二人で話し合つて、これからどうするかを決めたらよいのである。——ところが、この「女（妻）」は、相手に一言も言わず、また、身動きもできないままに「ひと思いに殺している」ということは、何よりも「夫を殺すことを最優先させている」ということである。それでは、なぜ、夫を殺す理由があつたのかと問えば、それは、まず、この女性は、非常に「気の強い」（自尊心の強い）女性であり、それゆえ、盗人に手ごめにされたこと、しかも、それを夫に見られてしまったことが、何よりも「許せない」のであり、それに加えて、私を蔑むような眼差しも、絶対に許せないということになるのだろう。しかも、夫が生きていれば、必ず、この「手ごめ事件」のことを誰かに話すに違ひなく、たとえ誰にも話さなくても、それを知られていること自体、そもそも「許せない」ということであり、それを完全に封じるには、まさに「夫を殺すしかない」ということであり、すべては、自分の「悪夢」を闇に葬るためである。もちろん、何度も「自殺」を図つたと言つてはいるが、それも本当であるかどうかは分からず、現に今も生きているということは、「わたしもすぐにお供します」という言葉は、未だ遂行されてはいないことになるだろう。とは言え、むろん、いわゆる「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）に深くさいなまれてゐるのも、また、「事実」（ほんとうのこと）なのである。

七、巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめにする、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云つても嘘と思え。——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶をした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ。——盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人(ぬすびと)にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡(もた)げた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛(しば)られたおれを前に、何と盗人(ぬすびと)に返事をしたか？ おれは中有(ちゆうう)に迷(まよ)つていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚(しんい)（怒り）に燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた。——「ではどこへでもつれて行つて下さい」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇(やみ)の中に、いまほどおれも苦しみはしまし。しかし妻は夢のように、盗人(ぬすびと)に手をとられながら、藪(やぶ)の外へ行こうとすると、たちまち顔色(がんしよく)を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません」。——妻は気が狂つたように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい」。——この言葉は嵐(あらし)のように、今でも遠い闇(やみ)の底へ、まっ逆様(さかさま)におれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪(のろ)むらしい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこのくらい、——（突然、逆(ほしほし)進むとき嘲笑(ちやうしやう)）、その言葉を聞いた時は、盗人(ぬすびと)さえ色を失つてしまった。「あの人を殺して下さい」。——妻はそう叫びながら、盗人(ぬすびと)の腕(うで)に縋(すが)っている。盗人(ぬすびと)はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴(けたお)りに蹴倒(けたお)された。（再び、逆(ほしほし)進むとき嘲笑(ちやうしやう)）、盗人(ぬすびと)は静かに両腕(りやううで)を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あんな女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領(うなず)けは好(よ)い。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人(ぬすびと)の罪は赦(ゆる)してやりたい。（再び、長き沈黙）妻はおれがためらう内に、何か一声(ひとこゑ)叫ぶが早い、たちまち藪(やぶ)の奥へ走り出した。盗人(ぬすびと)も咄嗟(とつさ)に飛びかかったが、これは袖(そで)さえ捉(とら)えなかつたらしい。おれはただ幻(まぼろし)のように、そう云う景色を眺(なが)めていた。

盗人(ぬすびと)は妻が逃げ去つた後(あと)、太刀(たち)や弓矢(ゆみや)を取り上げると、一箇(いっかん)所だけおれの縄(なわ)を切つた。「今度はおれの身の上だ」、——おれは盗人(ぬすびと)が藪(やぶ)の外へ、姿を隠(かく)してしまふ時に、こう呟(つぶや)いたのを覚えてる。その跡(あと)はどことも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声(こゑ)がする。おれは縄(なわ)を解(と)きながら、じつと耳を澄(す)ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声(こゑ)だつたではないか？ （三度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀(さす)が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸(むね)へ刺(さ)した。何か腥(なまぐさ)い塊(かたまり)がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸(むね)が冷たくなると、一層(いっしやう)あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰(やまかげ)の藪(やぶ)の空には、小鳥(こどり)一羽(ひとすず)囀(さえず)りに来ない。ただ杉や竹の杪(うしろ)に、寂(さび)しい日影(ひかげ)が漂(ただよ)っている。日影(ひかげ)が、——それも次第(しだい)に薄(うす)れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれてる。

その時誰か忍(しの)び足に、おれの側(そば)へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇(うすやみ)が立ちこめてる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸(むね)の小刀(さす)を抜いた。同時に、おれの口の中には、もう一度血潮(ちまほ)が溢(あふ)れて来る。おれはそれぎり永久(とこ永久)に、中有(ちゆうう)の闇(やみ)へ沈(しず)んでしまった。（本文・完）

夫(みこ)（巫女）の言葉

では、最後の「巫女の口を借りたる死霊の物語」であり、その「本文」は、次のようなものである。それは、「……盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云っても嘘と思え。——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然と笹の落葉に座つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似を働いたのだ。——盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した」。

さて、ここまでの「内容」は、どこまでが「ほんとう」で、また、どこから「うそ」なのかは、何とも判別しがいものであるが、ただ、夫は縛られたままであり、また、口も利けず、妻へ何度も「目くばせ」をしたが、それが「正しく伝わっていた」とも思えず、夫の目（主観）から見れば、二人は、むしろ親しくなっていくような感じであり、しかも、「……では、どこへでもつれて行つて下さい」と、妻は、確かにそう云つたといふのである。

しかも、妻の罪はそれだけではなく、藪の外に出ようとする時に、杉の根のおれを指さして、「……あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません」と。——妻は気が狂つたように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい」。一度でもこれくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるのか！ その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失つてしまった。「あの人を殺して下さい」。——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋っている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返答をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒された。盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「……あの子はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ頷けば好い。殺すか？ ——おれは、この言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい」と思つたとある。

妻は、おれがためらっているうちに、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人は咄嗟に飛びかかったが、これは袖さえ捉えきれなかった。盗人は、妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切つた。そして、それらを持つて藪の外へと姿を消した。その跡は、どこも静かだった。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ましていた。おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落とした、小刀が一つ光っていた。おれはそれを手に取ると、一突きにおれの胸へ刺した。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれていた。「……その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった。……」とある。

つまり、夫は、自ら縄を解き、自ら下に落ちていた小刀で自分の胸を刺したことになる。それでは、なぜ、自ら胸を刺したのかと問えば、それは、やはりこのまま武士として「生き恥」をさらしたくないということになるのだろう。そして、その後、藪の奥に隠れていて、恐らく、様子を伺っていたであろう妻は、忍び足で近づいて来て、夫の胸に刺さ

っている小刀を抜き取ったということである。それは、なぜかと問えば、それは、やはり自分が疑われるような証拠は残しなかつたとともに、できれば、一連の「悪夢」をすべて闇に葬って、何事もなかつたようにしたかつたということでもあるのだろう。

ところが、血に塗れた自分の「小刀」を引き抜いた時には、どこか、「……自分が夫の胸を差して、それを引き抜くような感覚」があつたのかも知れない。そのような「感覚」から、また、結果として、夫を「自殺へと追いやってしまった」というような、そのような「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などから、女（妻）という人は、やがて、検非違使に問われた時に、「……自分が夫の胸を差しました」というような「自供」になつたのではないかと思う。

八、事件の真相

それでは、この事件の「真の内容」は、一体、どのようなものだったのか？ それを簡単に要約して終わりにしたいと思う。——まず、夫が杉の根に縛られ、その前で「妻」が手ごめにされたところまでは、すべて同じである。それゆえ、大事なのは、その次であり、女（妻）の「手ごめ」の後、盗人（多襄丸）という男は、その女（妻）を何とか巧みに口説き説得すると、やがて、女（妻）は、「……ではどこへでもつれて行つて下さい」と言つたという。しかも、それだけではなく、二人で藪の外に出ようとする時に、突然、妻は振り向いて、杉の根の「夫」を指さして、「……あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません」と、妻は気が狂つたように何度もこゝろ叫び立てたという。その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失つてしまつた。「……あの人を殺して下さい、妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋っている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返答をしなかつた」とある。

つまり、盗人は、しばらくどうしようかと迷つていたが、突然、妻を竹の落葉の上へと、ただ一蹴りに蹴倒したのである、それは、なぜかと問えば、それは、「……あの人を殺して下さい」と何度も叫ぶ、その「妻の非情な態度」が許せなかつたのであり、それゆえ、夫の方へと眼を向けて、「……あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか、返事はただ頷けば好い。殺すか？」ということになるが、夫がためらつていううちに、妻は、たちまち藪の奥へと逃げ出してしまふ。その後、盗人は、妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけ夫の縄を切り、そして、それらを持って藪の外へと姿を消して行く。一方、藪の奥へ逃げ込んだ妻は、恐らく、それらの様子を近くでじつと伺つていたが、やがて、夫は、自ら縄を解き、また、自ら下に落ちていた小刀で自分の胸を刺したのを見て、やがて、忍び足で近づいては、夫の胸に刺さつている小刀を抜き取つたのである。それは、やはり、自分が疑われるような証拠は残しておきたくはなかつたということでもあるのだろう。……

つまり、誰も（それは「妻も盗人」も、いわゆる「夫を直接は殺してはいない」のである。夫は、むしろ「武士らしく、自ら命を絶つた」のである。確かに「直接は殺してはいない」が、しかし、間接的には「夫を殺している」のである。つまり、夫をして「自ら命を絶つ」ように仕向けたのは、まさに「妻と盗人」に他ならないからである。それでは、どちらが「罪深い」ことなのか？ ——これは、最初が多襄丸の自供の中でも、彼は、「……

…何、男を殺すなぞは、大した事ではありません。わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしという言葉（それは「相手のためと見せかけて、実は（相手をだまして）自分の利益をはかる」）でも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きています。——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません」という文章があつたことを思い出して欲しい。

つまり、どちらが「罪深い」ことなのか？ それは、例えば、盗人（多襄丸）のように、直接、「人を殺す事なのか？」、それとも、例えば、「政財界」その他の人たちのように、「……太刀は使わないが、権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけでも殺すでしょう」、そのように、間接的に「人を死に追いやることか？」、つまり、「作者」（それは「芥川龍之介」）であるが、彼（芥川龍之介）がここで最も「問いたかった」とは、まさに「そのこと」だったのである。——つまり、直接、「人を殺す」ことは、もちろん、「罪深い」ことではあるが、しかし、一方、間接的に「人を殺す」ことも、それに劣らないくらい「罪深い」ことであるというのが、まさに「作者」（つまり「芥川龍之介」）の「考え方」であり、それこれは、まさに「最も言いたかったこと」に他ならないのである。

*

*

「参考文献」

- ※底本「羅生門」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「杜子春」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「蜘蛛の糸」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「藪の中」芥川龍之介著（「青空文庫」）